

駆ける魂

外野に進退を決められるのは、耐えられなかった



柔道男子60⁺級 野村 忠宏 (35歳) ①

2年前に手術した右ひざが、元に戻ることはない。35歳。「今から技術が飛躍的に伸びるか、体力がつくか」といえば、それは無理。落ちる部分をどうカバーするか。「それでも野村忠宏(ミキハウス)は、オリンピックとの再会を夢見る。初出場したのは1996年のアトランタ五輪。天理大に通う21歳の学生は快進撃で見事に金メダルを手にした。さらにシドニー、アテネと男子60⁺級で3連覇。まさに無敵。五輪の暈に愛された男だった。4連覇をもくろんだ2008年の北京五輪。ここで完全燃焼していたなら、納得して引退していただろう。しかし、待っていたのは厳しい現実。野村は出場すらできなかった。

狙った4連覇、けがで暗転

07年5月―。組んで技をかけあつ「乱取り」と呼ばれるけいこの最中、柔道人生が暗転した。「ブチッ」。心寒くなる音とともに、すさまじい痛みが右ひざを見舞う。右ひざを支える前十字靭帯(じんたい)がスタスタに切れていた。本番まで2年近くあれば即入院して手術するところだが、このときは選考まで時間がなかった。テーピングでぐるぐる巻きにしてひざを固定し、ごまかしながら戦うしか道はない。ひざにたまった水を注射器で抜き、代わりにヒアルロン酸を入れて、しばらく安静に。もともと脇腹に少し張りがあるだけで集中できなくなる性分。満足なけいこができるはずもなかった。いちろの望みを託した北京五輪の最終選考会。準決勝で、浅野大輔(自衛隊)に優勢負けを喫した。偉業

ロンドンへ黙々と技磨く

の夢はあっさりと幕を閉じた。試合会場の福岡から大阪へ戻る新幹線の中で手術を過決断した。ひざを切開し、立内視鏡を入れてみる。事態は予想よりも深刻だった。軟骨はえぐれ、半月板も原型をとどめていない。前十字靭帯なしで激しい動きに耐えた右ひざは「複合損傷」を起こし、症状が悪化していた。「野村、引退へ」の報道が独り歩きを始めたのは、このころだ。しかし、野村のは、手術を受けた時点で12年のロンドン五輪を目指す腹を決めていた。「やるの自分。評価されるのも自分。意見する権利があると分したら、(所属先の)ミキハウスか、家族だけや」。外野に進退を決められるのは、耐えられなかった。08年の夏。柔道男子の先陣を切って始まった60⁺級